

(6) 中海漁業実態調査（平成 23～27 年度）

研究目的

中海の代表的な漁業で、成魚を積極的に漁獲しているさし網と、ほぼすべての魚種の周年的な出現動向を把握しやすいます網の漁獲物の魚種組成や漁獲量を詳細に調査し、中海の有用魚介類の資源動向の把握とそれらの有効活用を図ることを目的とする。

研究方法

① 標本船野帳調査

漁業実態および有用魚介類の動態を把握するために、さし網 1 地区（江島）、ます網 3 地区（美保関、東出雲、本庄）で、漁業者各 1 名に操業日誌の記帳を依頼した。記帳に際しては漁獲年月日、魚種名、漁獲量（kg）を記入してもらった。これを 4 か月に一回の頻度で回収し、水産技術センター内水面浅海部浅海科で集計・分析を行った。なお、記帳を依頼していた美保関地区の漁業者の逝去につき、当地区の調査はやむなく平成 26 年度で終了した（図 1）。



図 1 調査位置

また、本報告の調査期間は平成 23～27 年度の 5 か年であるが、ます網についてはそれ以前の期間にも同様の調査を行っており、比較検討のためその資料を利用している。

② 漁獲物買い取り調査

ます網 2 地区（本庄、東出雲）において、月 1 回の頻度で全漁獲物の買い取りを行い、出現魚種の種組成を調査した。

研究結果と考察

① 標本船野帳調査

(1) さし網

中海におけるさし網漁獲量の推移を図 2 に示す。中海のさし網漁業の主対象はスズキとボラで、この両種とも周年漁獲対象になり、中海全域に漁場が形成されている。また夏にはクロダイを対象に主として安来地先付近に、秋には中海西部沿岸域や弓ヶ浜半島沿岸の砂地にヒイラギの漁場が形成されるが、いずれも一時的で漁獲量としても少ない。

平成 23 年度からの 5 年間で総漁獲量は 7~10 トンで安定的に推移している。このうちスズキの漁獲量はわずかに増加傾向が認められるが、ボラは年変動が大きく、各年度の好不漁はボラの漁獲量に左右される。

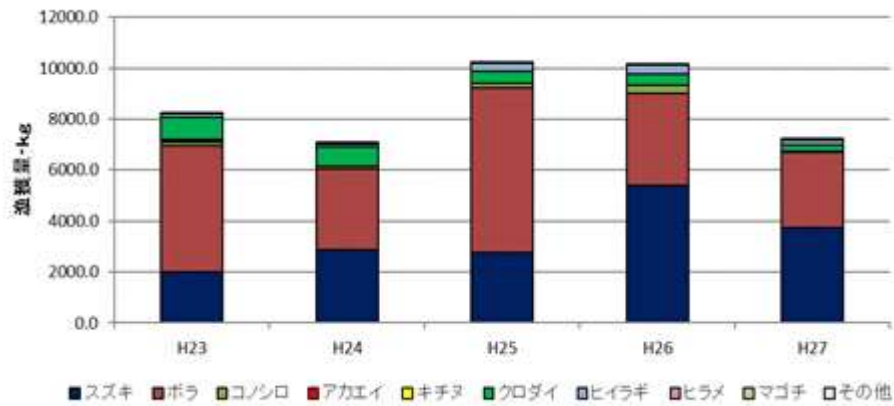


図2 中海におけるさし網漁獲量の推移

(2) ます網

本庄水域、美保関水域、東出雲水域のます網漁獲量の推移を図3に示す。本庄水域については平成17~27年度、美保関水域については平成18~26年度、東出雲水域については平成20~27年度の実績である。

本庄水域と美保関水域に着目すると、平成18年度から平成19年度にかけて漁獲量が急激に落ち込んでいるのが特筆的である。これは平成21年5月の森山堤防開削にむけた工事期間と同機であることから、その影響である可能性が高い。その後、美保関水域の漁獲量は次第に増加傾向を示し、平成26年までにほぼ元の水準近くに回復している。

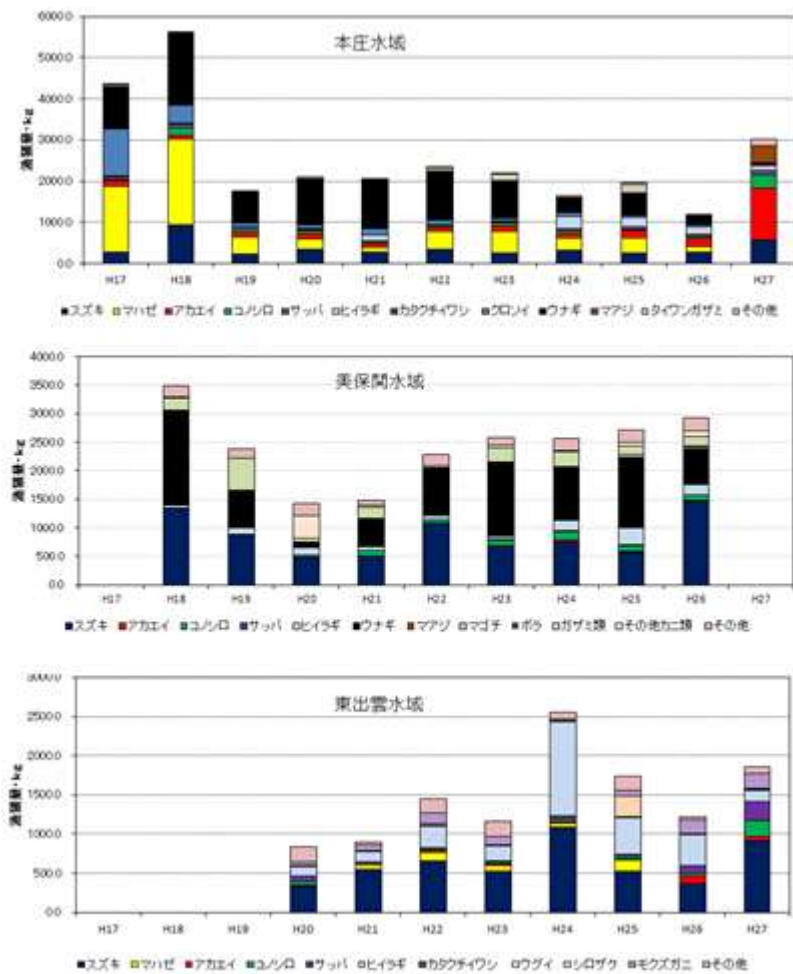


図3. 中海におけるます網漁獲量の推移

東出雲水域については開削工事以前のデータがないので直接的な比較は困難だが、調査を開始した平成 20 年以降は美保関水域の傾向と同様の増加が続いている。その一方で、本庄水域では大きな変化は見られず漁獲量は低位のまま推移している。

ここで魚種別の漁獲量の経時変化に注目すると、平成 18～19 年度の漁獲量急減の前後で大きな変化が見られたのはウナギ、マハゼ、クロソイ、アカエイ、ヒイラギ、マアジである。特に本庄水域の漁獲量の低迷の原因の主たるものとしてはウナギ、マハゼ、クロソイの急激な減少であると考えられる。いずれの種も本庄水域においては回復の兆しが見られない。

一方、アカエイ、ヒイラギ、マアジは平成 23～27 年度の 5 年間で急激に増加した魚種で、これは 3 つの調査水域共通の傾向と見られる。

② 漁獲物買い取り調査

平成 20～27 年度の調査で確認された魚介類のリスト一覧を表 1 に示す。本庄および東出雲で確認された魚介類は 19 目 56 科 106 種であった。このうち本庄水域では 18 目 54 科 94 種、東出雲水域では 16 目 50 科 86 種であった。

調査対象期間の平成 23～27 年度とそれ以前（平成 20～22 年度）を比較すると、本庄水域では 65 種から 86 種へと確認種数が増加した一方、東出雲水域では 64 種から 62 種へと若干減少した。このうち甲殻類（十脚目）に着目すると本庄における確認種数が 9 種から 15 種へと増加した。さらに東出雲水域のハゼ科魚類の確認種数は 10 種から 6 種へと減少している。

残された課題

ウナギ、クロソイ、マハゼなど、主に本庄水域で漁獲量が急激に減少したまま回復しない魚種はいずれも高単価であること、またいずれも地域に根付いた産品であることから、中海水域の漁業関係者には資源回復の期待が高い。

ウナギの場合、その資源減少要因として、来遊する稚魚が海流の流況の変化等によって激減していることなど、現在は地域としての問題よりもむしろ地球規模の課題として捉えられている。しかしながら、クロソイやマハゼなど中海水域で生活史を完結する魚種については、減少の要因を把握できれば、資源回復の道筋を見つけられる可能性がある。

また、近年漁獲が増加しているアカエイ、ヒイラギ、マアジの有効利用による収益拡大も重要な課題である。